

総合的な学習の時間

■語る会に向けての検討の経緯■

語る会に向けての検討の経緯：論点と提案

総合部会は、当初、幼小中それぞれの校種から人員を選出していたが、幼稚園・低学年部会の発足に伴い、小学校3年生から中学3年生までの7年間を見通していく総合部会に形を変えて話し合いを進めてきた。話し合いの中では、それぞれの校種で取り組んできた総合的な学習の時間について情報交換を行い、交流できる活動を見出ししたり、小中一貫した総合のあり方についての検討を行ったりしてきた。

〈第2回〉 総合部会はこの回から、発足

- ・ 幼稚園にとっては、教育課程そのものが総合的な活動であるので、本部会との関わりはとても重要だと考える（幼稚園）
- ・ 生活科は教科として成立しているが、幼稚園とのつながりや総合的な学習の時間とのつながりはどのようになっていくのか、今後の話し合いが気になる（小学校）
- ・ 中学校入学の段階で小学校において総合的な学習の時間にどのような活動を行ってきたのかアンケートを採っている。（中学校）
次回は、各学校でどのような活動を行っているのかを持ち寄ることになる。

〈第3回〉

- ・ 小学校、中学校それぞれにおける「総合的な学習の時間」についての基本的な考え方や内容に関して、情報交換・意見交換を行う。

〈第4回〉 開催せず

〈第5回〉

- 市民生活を育てる 8つの能力に対する7年間のカリキュラムづくりに取り組む。
- 小・中のそれぞれの取り組みを8つの能力に照らしてみても何が異なるのかを考えてみたい。
- 11月22日（水）の5・6校時に中3の総合発表会が開催される。そこに小6も加わって、発表会を聞きその感想等を分科会での話題とする。小6にとってのメリット、中3にとってのメリットを練っておく。
- 10月24日に向けて、金山はリードを作成。高木はカリキュラム。川路は小・中の総合の夢を考えてくることで話し終える。

〈第6回〉

- リード検討
- カリキュラム試案（構想）の検討

〈第7回〉

- 記録に関して……紙面、ICレコーダー、カセットで記録をとる。
- 分科会の持ち方に関して
 - ・ リード説明（現状と課題）
 - ・ 附小、附中の実践についての説明
 - ・ 小・中の交流的学習活動のあり方について参会者にも考えてもらい案を出す。
 - ・ まとめ
- リードの内容について
 - ・ 大切にしたいことの中に、小・中の交流的活動の意図に関しても入れ、課題も整理していく。

〈第8回〉

〈成果〉

- 総合的な学習における学びのサイクルを、川路先生の提案をうけて、小中ともに認識できた点。
- これまで行っていなかった交流活動（合同活動？）を実施したことにより、子どもたちへの意識の向け方、活動を実施するまでの準備の段取りなど、どのようなことが必要になるのかを考えることができた。交流活動当日の運営面についても同様。
- 活動を行ったことで、次への課題が見えてきたことも一つの成果。

〈課題〉

- 育てたい子どもの姿と7年間の活動内容をどうリンクさせていくか。
- 小中共通した基盤をつくっていく必要性。（「豊かな市民生活を創造する…」なら、それに向けて考えていくことが必要。
- 学習指導要領の改訂を見据え、時数についての検討も必要。

小中7年間の総合学習の構造づくり

1 現状と課題

小学校では、子どもたちの総合的な学びの場として、「ちどりにいきいきタイム（学級として行う体験的活動）」「全校活動（全校で行う体験的活動）」の2つを教育課程に位置づけ、「ちどりにいきいき活動」と総称し、研究実践を進めてきている。「ちどりにいきいきタイム」については、これまでの実践の積み上げをもとに、児童の発達段階や活動の系統性などを考慮しながら、「テーマタイム」と「フリータイム」という二つの柱を立てて取り組んでいる。

「テーマタイム」は、「様々な環境とわたしたち」「ともに生きよう」「つくりだそう、うみだそう」の3つがある。この3つのテーマは、さらに中学年・高学年単位で学習内容によりふさわしいテーマに変えている。これらのテーマに関わる学習内容を、2年間のスパンで学習していく。「フリータイム」は、各学級担任が児童の実態に応じて学習内容を決定する。

また、これまでの実践から、「人」との出会いや関わり方によって、子どもたちの活動が活性化することが明らかになっている。そこで、単元を通して出会ったり、学習の対象となったりする「人」について、次のようにとらえている。

◇中学年…自分と身近な人、〇〇を一緒にする相手など

◇高学年…普段あまり関わりのない人、物理的・心理的に遠い人など

全校活動では、「子どものお店」「夏祭り」「ディスカバー松江」などの活動を行っている。異学年のふれあいを高めることを第一の目的としながら、子どもたちにまかせる部分も多く取り入れている。特に、高学年には、縦割り集団のリーダーとしての資質を高めることを願い、「子どものお店」のように、お店の企画から運営までをほぼ全面的にまかせるなどの取り組みを行っている。近年は、英語活動についても総合的な学習の時間の中に位置づけ取り組んでいる。

中学校では、総合的な学習を大きく三つに分けている。一つ目は Bridge（～未来への架け橋～）、二つ目は Information 総合（情報活用能力を培う）、そして三つ目に Communication 総合（人間関係力を身につける）である。

Bridge（～未来への架け橋～）では、第1学年は「様々な生き方を学ぶ」をテーマに、調査学習や福祉施設での体験学習を中心とした取り組みなどを行っている。「他者との関わり方」「障害のある方との接し方」をテーマに外部講師を招いたり、学年部外の教員とのTTなどを取り入れたりするなど、様々な人との関わりを大切にしている。第2学年では「自分自身の生き方を学ぶ」をテーマとして、今の自分と将来の自分の生活を見つめ、生き方を探るカリキュラムを編成している。特に2学期に行う職場体験学習が中心となる。実際に職場で体験したり、職場で働く人たちの姿に直接触れたりすることを通して、これからの自分のあり方について考えを深めていくことを願っている。第3学年では、「他と共に生きる生き方を学ぶ」をテーマに、自分のよさを発見したり、再認識したりしたうえで、そのよさを社会でどのように生かすのかを考え、実行に移すことを願った取り組みを行っている。中学校生活を通して、様々な人の生き方にふれたり、実際に職場体験を通して、自分の存在意義について考えたりしてきたことを土台として取り組んでほしいと考えている。

Information 総合（情報活用能力を培う）では、コンピューターを使って、自分に必要な情報を集め、それらを自分で整理しながらまとめていく活動など、情報活用能力を培うことを主なねらいとして取り組んでいる。

Communication 総合（人間関係力を身につける）は、主に学年や学級の人間関係づくりに重点を置いて取り組んでいる。

このように、これまでそれぞれの校種ごとに取り組んできた総合的な学習の時間の活動を、一貫教育という視点から見た場合、基本的な考え方に大きな違いは見られないものの、次のような問題点が浮かび上がってきた。

- ・活動内容や活動を活性化させるための人との関わり方について十分に整理できていない。
- ・小学校で取り組んできた活動内容を、中学校側にしっかりと伝えてきていない。
- ・小・中学校ともに、幼稚園児との交流活動は行っているが、小学生と中学生との関わり（交流）をもつ活動に関しては行っていない。
- ・小学校では、全校活動のように異学年集団での活動を年間数回取り入れているが、中学校では同学年での活動が中心であり、異学年集団での活動はほとんど行われていない。
- ・総合的な学習の時間の運営の仕方に関して違いがあること。

これらの問題点を解決していくために、それぞれの児童・生徒の実態やカリキュラムの全体構造を考慮に入れながら、私たちが取り組んできた活動を7年間のスパンの中で再検討・再構築していくことがこれからの大きな課題である。

2 幼小中一貫教育に向けて、大切にしたいこと

前述したように、幼小中一貫教育に向けた課題は多岐にわたる。その中で、今年度は小中学生が交流する場を意図的に設け、小学生と中学生が交流することのよさや、それによってこれまで単独（小学生だけ、中学生だけ）で行ってきた活動がどのように変わってくるのかなどに関して検討することにした。具体的には、中学3年生 Bridge（～未来への架け橋～）の発表会に、小学6年生が参加する。これまでは中学生だけで行っていた活動に、小学生を参加させることで、双方の子どもたちにとって次のような価値が見い出せるものと考えた。

まず、中学3年生にとっては、発表の成果を伝える相手に小学生が加わることから、小学生にも分かりやすく伝えるための内容や方法、あるいは言葉の検討を行おうとする意識を強くもつことができる。自分がこれまでに取り組んできたことを、ただ単にまとめるだけではなく、小学生という相手の立場に立って物事を考えようとすることで、相手を思いやる心を育てていくこともできる。

一方、小学6年生にとっては、中学3年生の発表を聞くことで、この中学校に入学し、卒業する頃には自分もこのような活動を行うのだという見通しをもつことができる。また、中学生の真剣な取り組みを直に感じたり、直接会話をしたりすることによって、中学生に対する意識の変容やあこがれをもつことにもつながるであろう。自分はどのような中学生になっていこうとすることを考えることは、この時期の子どもたちにとっては、価値あることだと考える。さらに、中学3年生の学習を知ることや、どのような方法で発表されたのかを知ること、貴重な経験になると考える。

このように、これまで私たちが取り組んできた活動を一貫教育の視点から見直し、できることから取り組んでいく姿勢を今後も大切にしたいと考えている。

■分科会の整理と総括■

1 小中7年間の「総合的な学習の時間」の実際の報告

小学校と中学校の、それぞれの「総合的な学習の時間」のカリキュラムについて説明をした。その後、「小中7年間」を見通した際の課題を明らかにした。例えば、小学校も中学校も「人」との関わりを大切にしてきたが、7年間を考えると一貫性がないこと、小学校では異学年集団での活動があるが、中学校ではないこと。小・中学校それぞれお互いの活動についての情報がないことである。それらをふまえて、中学校3年生がどのような姿であるとういのかを念頭において、7年間のスパンで考えていくことが必要だということを説明した。

11月に行った、中学校3年生の活動の発表を小学校6年生も一緒に聞くという活動の報告を行った。それぞれの担当者が、異学年での交流だからこそ味わえる、緊張感や思いやりのある姿が見られたことを報告した。また、小学6年生は中学校生活の見通しやあこがれがもてたということが挙げられた。

2 質疑応答

松江市教育委員会、福島指導主事から「他の教科よりも『総合的な学習の時間』は一貫教育をだしやすい。それぞれの学校で共通した目標が、発達段階に応じてあるのかどうか。」という質問をいただいた。それに対して、「今回の交流活動を参考にして、従来の小中学校の活動内容を参考に考えていきたい」「社会に出た時に、答えの見えないものに対して向かっていけるような子どもを育てることが大切だと思う。

(子ども同士だけではなく、より広い意味での)人間関係を編み出していくことが本校の『総合的な学習の時間』のポイントではないかと考えている」と答えた。

奈良女子教育大学附属小学校の谷岡先生から、「活動の成果を発表して拍手をもらって終わるのではなく、そこから本当の学習が始まるのではないか。」という質問を、実践をふまえた形でいただいた。それに対して「発表の後、どのように感じたり考えたりしたのか、そして活動中の学び合いを大切にしていきたいが、まだ検討中である。」と答えた。

3 新しいカリキュラム案

島根大学の川路先生から、小中7年間を見通したカリキュラム案を提案していただいた。

附属小学校・附属中学校の7年を一貫する「総合的な学習の時間」のプラン
市民生活・社会をキーワードに

